
「クラブ ファントム」

りん太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「クラブ ファントム」

【Zコード】

Z0072F

【作者名】

りん太郎

【あらすじ】

超美人キヤバ嬢「静^{じず}」と秘密主義の男「梅崎^{うめざき}」の仲良しコンビが、キヤバクラ「クラブファンタム」で起こる出来事や噂話に、お気楽?、時にはシリアルス??に迫る。一話完結の形式をとっているが、シリーズを通しての「静」と「梅崎」の恋の行方にも注目・・・

第一話 恋は盲目（前書き）

当小説はキャバクラを舞台としています。表現、描写には注意をしているつもりですが、差しをわりがあると感じ判断された方は遠慮ください。

第一話 恋は盲目

「クラブ ファントム」

第一話 恋は盲目

九月に入ったといふのに蒸し暑い日が続いている。日が落ちても外に出ると汗ばむほどだ。

しかし、どこからともなく虫の音が聞こえたり、空気に透明感を感じたり、少しずつ少しずつ秋の気配が漂う。

都内某所。

夜の街も数年前に比べると、長引く不況のためか、街行く人波もまばらでどこか寂しげだ。

しかし、ここだけは以前のまま変わらない。

一步店内に入れば、今日もきらびやかな照明と華やいだ雰囲気の中で世の中の縮図を見せてくれる。

そう、ここは「クラブ ファントム」。

色と欲と見栄の世界。

ここでキヤバクラについて少し説明しておこう。

キヤバクラとは、一時間いくらといつ決められたセット料金でお店に入る。

お店に入ると女の子が、基本的にマンツーマンで隣に座り、お酒やお話を相手してくれる。

通常は一時間で一、三人の女の子が廻ってくれる。

気に入った女の子がいれば『指名』をすると、その女の子がテー

ブルについてくれる。

指名の無いお客さんを「フリー客」、指名のあるお客さんを「指名客」と呼ぶ。

また、指名には一種類あり、初めから指名の女の子が決まっており、入店時に指名を入れるのを「本指名」とい、店内に入つてから、気に入った女の子を見つけ指名することを「場内指名」という。この「本指名」の女の子をめぐつて、女の子とお客さんと男子スタッフが、悲喜こじらせるドラマ、色と欲と見栄の世界を紡ぎあげていく。

「いらっしゃい。今日も一日お疲れ様。」

そこには真っ白でふんわりとした素材のロングドレスを身にまとつた、とてもかわいくて、とても美しい女の子が微笑んでいた。

その微笑みは、いつもと変わらぬ完璧な微笑で、妖艶さとはかけ離れた、すがすがしい清涼感を伴う微笑み、かといって決して冷たい印象ではなく、とても暖かな、その人柄が表れるような微笑だ。

女の子の名前は「静」。

切れ長で一重、黒目がちな大きな瞳。

鼻筋もすつきり通り、その切れ長が意志の強そうな目元とあいまって勝気な印象を与える。

唇はいつもキラキラと輝いている。

どこからどう見ても二十歳過ぎにしか見えないが、年齢は二十八歳だ。

背はそれほど高くは無いけれど、ほつそりとしていてスタイルは抜群によい。

その身のこなしさは子猫のようにしなやかで、優雅で落ち着いた大人の女性を若く活動的に見せていく。

美しく長い髪の色は少し明るめのブラウンで、今日はクルクルと巻いている。

静は五年前にこのお店「クラブ ファントム」で働き始めた。

今までに色々な職業を経験し、人並み以上に苦労をしてきた静だつたが、夜の仕事は初めてであった。

五年も勤めれば立派なベテランである。

しかし、静は何故かいつまでも初々しいままだった。

「お疲れ様。」

梅崎は短く答えた。

いつものようにソファーアーに寝そべるように腰掛け、長い足を放り投げていた。

梅崎もどう見ても二十代にしか見えないが実際は三十代半ば。静にとって五年前に初めて指名を貰ったお客様であり、一番に仲のよいお客様なんだ。

梅崎は謎の多い男、というよりは、秘密主義で通しているらしい。もちろん静は梅崎の職業も年齢もファーストネームも知っている。なかなかこの二人、プライベートでも仲がよろしいようだ。

しかし、梅崎のプライベートや一人の付き合いは、今のところ物語にはあまり関係がないので、彼の秘密主義を尊重しよう。店内の大画面には、去り行く夏を惜しむかのように、南の島の白い砂浜と透き通るように青い海が映し出されている。

一人はその映像を見るわけでもなく、グラスを傾けながら、楽しげに過ごしているようだ。

梅崎は足を放り投げた姿勢のままくつろいでいる。

静もこれもまた、お店にいるとは思えないようなリラックスした表情でいる。

「今年の夏は海に行けなかつたわ。プールに行つただけ。」

「そうか。でもまだ南の国に行けばいつでも夏だよ。」

「そりなんだけね。私、近頃は季節感を大事にしたいと思つてゐる。今は夕暮れに夏の終わりを感じているわ。」

「それで月でも見て、秋を感じ始めるのかい？」

「そうそう。」

「随分と風流になつたものだ。」

静は笑つてゐる。

梅崎は「本当か」といつ表情で静を眺めてゐる。

静の視線が動いた。

「来た、来た。」

静は梅崎に話しかけるといつよりは、むしろ独り言のよひにしつぶやいた。

「あのお密さんのことか。」

梅崎は左手の三つほど向いのボックス席に視線を流した。

「セヤチヤんとお密さんのはうはタカちゃんよ。」

「セヤチヤんといえば、マジで惚れてます感を出しまくつて、熱く通つてくるお密さんが多いいよね。」

「そうなのよ。いろいろとセヤチヤんについてはお話をあるのよ。」

「どんなお話かな。」

「うん、こんなお話だよ。」

静はゆつくりと、そして少しだずらつぽく語り始めた。

さやは関西出身の一十四歳。

現在、都内の某一流大学に在学中。

一人暮らし。

彼氏なし、らしい。

約一年ほど前に入店した、清楚なお嬢様系の女の子だ。

実際、旧華族系の令嬢という、筋金入りのお嬢様なのだ。

二年間のフランス留学を経て一度帰国。

しかし今までアルバイトもしたことが無いし、実家からも独立するため、自分で一生懸命働いて、もう一度、大学卒業後フランスに留学したいという、やっぱりどこか少しづれている感もあるが、

真面目な女の子だった。

ちょうどアルバイトを探して街を歩いているとき、このお店に

スカウトされ、世慣れてないこともあり、なんとなくキャバ嬢を始めた。

もちろん頭脳明晰、容姿端麗、日、英、仏の三ヶ国語を使いこなす、そういう意味では非の打ち所のない才女だ。

一方、お客様のタカちゃん。

地元の土建屋に勤める三十二歳。

推定、身長一八二センチ、体重一一三キロ。ひらも推定、縦にも横にも大きい。

夏場はいつもアロハシャツを着ている。

かなりの見栄張りで妄想族らしい。

静が待機席で聞いた女の子たちの話をまとめてみると、さやちゃんにマジ惚れで通つてくるお客様は本当に多いらしい。

その中でも特に熱いお客様が一人。

その一人がこのタカちゃんだといつ。

待機席とは、テーブルのない女の子たちが、出番を待つて、待機している場所のことを言つ。

お店によって、専用の待機場所のあるお店や、店内のお客さんのいないテーブルを待機席にしているところがある。

話を元に戻そう。

「タカちゃんて、わかる？」

一人の女の子が、隣の女の子に話しかけていた。

「知っているよ。さやちゃんのお客さんでしょ。いつもアロハシャツを着ている、あの体の大きな人でしょう。」

「彼、さやちゃんに給料三か月分の指輪を買ってプロポーズしたいよ。」

「マジで。さやちゃんは受け取ったの？」

「彼が言つには、受け取つたらしそよ。もう結婚した氣で浮かれていたもの。」

「じゃあ、もう一人の北島さんの話は聞いた？」

「そつちは聞いてないわ。」

北島さんとはさやちゃんにマジ惚れで通つてくるもう一人。

タカちゃんとはライバル関係にある。

もちろん、さやちゃんの気持ちとは関係ない。

「北島さんも、さやちゃんにプロポーズしようと思つて、ヘリコプターを予約して横浜ナイトクルーズにさやちゃんを誘つたらしいの。

」

「北島さんもヤルわね。」

「だけど、さやちゃんもヤバいと思つたみたいで、断つたらしいわ。さやちゃんもとぼけている割には勘が鋭いのよ。北島さん、フランたといつて泣いていたわ。」

女の子たちの会話はまた別の話題へと移つていった。

「なるほど。」

「梅崎さん、どう思う。」

「二人とも、そんなに熱くなつて、大丈夫なのかな。北島さんはまだお店に来ているの？」

「前よりはペースは落ちているけど、それでもたまには見かけるわ。」

「そうか。それよりもさやちゃんが、指輪を受け取つたのが本当ならちょっととした事件ですね。」

「そうよね。私なら受け取れないわ。その場で断つちやう。」

「大好きな人でも断つちやうの？」

「大好きな人からのプレゼントなら別よ。」

静の顔がほのかに赤くなつていて、少し酔い始めたのだろうか。

それとも、別の理由なのか。

静は梅崎のほうも微笑みながらもにらんでいる。

梅崎は静の視線に気づかない振りをして話を続けた。

「しかし、タカちゃんも勝負かけたよね。」

「 わづね。私が見ている限り、じやわやちやんのまつは全くやの飯はなさそつなのに、よく勝負にでたわね。」

「 やつぱり、タカちゃんは舞い上がっているのか、それともわやちゃんは色恋なのか。」

梅崎は血問しているよつぱりふやいた。

梅崎はさやと何度か話したことがあった。

そのややの記憶を思い起しきつむつだ。

「 さやかやさんは違うわ。」

静はきつぱりと言いついた。

梅崎の「さやが色恋」の言葉に反応したらしく。

「 ひでほんの少し「色恋営業」について説明しておひづ。

「 色恋営業」とは、お密さんを捉まえる手段として、恋愛関係のお付を企てることである。

顧客確保の手段としてなので、むちりん嘘である。

しかし、お密さんには本意の」とと信じてもらわなければいけないのでの、お密さんのはづは本意である。

ちなみに、身体まで『えてしまつのは「枕営業」と云々、これをする」と、お店のほかの女の子から嫌われるらしい。

「確かにさやちやんのお密さんは、彼女に恋してる人が多いけど、それはわやかやんがこゝに過ぎないからだわ。彼女の雰囲気がわづせるのよ。」

「 锐いねえ。でもそのこゝかぎるとこゝのと彼女の雰囲気が問題なんじやないかな。」

梅崎は静を眺めにやにやしている。

梅崎はこやにやしてはいるが、静が鋭いことにせずつと以前から、好ましく思って、また尊敬に近いような気持ちも持っていた。

静は感性が豊かで、洞察力にもすぐれている。

ようするに、直観力にすぐれているのだ。

「 いい子すぎるのが問題? 雰囲気が問題? 」

静はそうつぶやき、何か考えているようだ。

「 いい子すぎるのが問題? 雰囲気が問題? 」

静はそうつぶやき、何か考えているようだ。

「前にお店の女の子の雰囲気にはタイプがあるとか、無いとか、梅崎さんが話してたような気がするんだけど・・・。」

「話したよ。」

梅崎はそう答えてからタバコを口にくわえた。

静がすぐに火をつける。

梅崎が美味そうに、煙をいっぱいに吸い込んだ。

梅崎の目が鋭くなり、脳内に持つCPUが動き始めたようだ。三つ向こうのテーブルで俯いているさやに目線が向けられた。静と梅崎は似ているといえば似ている。

また、似ていないとえれば似ていない。

似ている点は、二人が考えて出す答えが似ている。

似ていない点は、考える方法、過程は別の手段をとっているようだ。

タイプわけすると、静は直感タイプ。

梅崎は論理派タイプ。

結果が近いので、お互いの考え方、手段の違いも個性として尊重しあい認められる。

だから一人は仲良くやつていけるのである。

梅崎の視線はさやを捕らえたまま、語り始めた。

お店で働く女の子にはいくつかのタイプがあるという。

梅崎は大まかに分けて、二×二×二で八タイプに分けている。

話し型、色気あり、明るい。
話し型、色気なし、陰あり。
話し型、色気あり、陰あり。
話し型、色気なし、明るい。
ノリ型、色気あり、明るい。
ノリ型、色気なし、陰あり。

ノリ型、色気あり、陰あり。
ノリ型、色気なし、明るい。

もちろん、あまり存在しない組み合わせもある。有り無しの微妙な混じりもある。

だが梅崎は大体このように分けて考えているようだ。

「静は普段はノリ型、明るい、まで同じで相手によつて色氣有り、色氣なしの一タイプを使い分けているよね。」

「そうだね。うん、そのとおりだわ。」

「でも、静の本質は、話し型、基本色氣なしだけど微妙に有り、明るいけど陰はあり、とオレは見ているね。この明るいけど陰があるところが微妙な色氣につながっているんだと思つ。」

「さすが。よく見ていらつしやる。」

静は嬉しそうに梅崎を見つめている。

「さやちやんはどのタイプなのかな？」

静は首を少し傾けて尋ねた。

「さやちやんは、話し型、健康な色氣、明るい、このタイプだね。しかもこの三つの要素のバランス感が絶妙だよ。天性のものだね。」

「わかる、わかる。このタイプって男の人は好きなの？」

「ベストかどうかは個人差があるから別として、男女問わず、このタイプの子を嫌いという人はいないでしょう。」

「うん。それでいて実はこのタイプの女の子はキャラクタには少なかつたりして。」

また静は鋭いことを何の気なしにそのかわいい唇から発した。

「静は怖いな。」

でも、梅崎は本当に嬉しそうに静を見つめ、話を続けた。

「本質このタイプの子はいるのだらうけど、みんなお店ではキャラをある程度は作っているだらうしね。さやちやんはキャラを作らないといふか、作っているつもりでもうまく出来ていないのか。その辺がお嬢様なのかな。」

梅崎はグラスを口に運び喉を潤す。

「そうね。さやちゃんはお嬢様だけど、美人だし、もうほん頭は良くて話題豊富、性格も良い意味でおつとつして明るく健康的。これではどんな男でも惚れちやうね。」

静は一人でうなずきながら納得しているようだ。

「ここでのポイントは、健康的な色気だね。」

「わうなの?」

静はまた小首を傾げる。

静のこのしぐさは、抜群にかわいい。

梅崎は静のこのしぐさに触れるたび、内心どきどきする。

少し慌てたように、梅崎はまたタバコの煙を深く吸い込んだ。

「色気といふのは、異性に対するセックスアピールという部分があるでしょう。このセックスアピールが健康的で明るいということは、まずセックスの淫靡なイメージを払拭してくれる。第一に『エッチしたいぜえ』と思わせるけど、その気持ちを走らせ過ぎない。色気全開だと気持ちがセックスに走りすぎて、エッチがしたいのか、その相手の子が好きなのか本当のところが見分けづらくなるんだよね。」

「なるほど。とにかく、さやちゃんを相手にしたお嬢さんは、さやちゃんを好きだけどセックスが一番の目的じゃないことよ、ってなるのね。」

「やうなんだよ。明るい色気は怖いね。その上、さやちゃんはおつとつしてて、清楚系で嘘もつたり無い。お嬢さんはさやちゃんを信用する。」

「やうやうして、一番ハマったお嬢さんが、タカヒコと北島さんなんのね。」

静は納得がいったのか、しきりにうなずいてくる。

「北島さんが脱落したことをタカヒコさんは知っているのかな?」

梅崎は静に尋ねた。

「それはわかってると思うわ。」

静は自信ありげに答える。

「タカちゃんのほうは、北島さんが脱落して、指輪も受け取つてくれたから有頂天、というところか。」

梅崎は少し考えるようになしながら、もう一度さやの横顔を見つめた。

「あれ！何かヤバそうな雰囲気だよ。」

梅崎の言葉に静もさやのほうを見た。

「本当だ。何かもめてる。何してるのかな？」

梅崎と静はさやとタカちゃんを凝視している。

「あれ、指輪を返してんじゃないかしら。」

静が梅崎の耳元に顔をよせて囁いた。

梅崎は静の顔がすぐ横にあることに気づき、またどきどきした。

どうもこの梅崎と静の二人は妙な感じだ。

変なところで二人ドギマギしたりする。

以前からお互い思うところはあるようなのだが、この二人の関係は二人にしかわからない。

いや、一人にもわからぬのかも知れない。
もちろん、筆者もあずかり知らないところだ。

それというのも、筆者はあまり深く突っ込んで考えているわけではないので、そこまで設定していないだけである。

いい加減なものだ。

二人の関係は今後の展開に期待しよう。

閑話休題

話しを元に戻そう。

さやとタカちゃん、何かを押し付けあつてるようだ。

タカちゃんの左手の薬指にきらりと光るもののが・・・。

まず、静が気づいた。

それとほぼ同時に梅崎も気がついた。

静と梅崎の兩人、一瞬見つめあう。

そして、二人でにやにやしあじめた。

「これは、さやちゃんを場内指名で呼んで、本人から直接詳しい話を聴きたいな。呼んでもいいかな？」

梅崎は静に了承を求めた。

「うん、場内しよう。」

静は快く了承した。

梅崎と静はゆつたりとグラスを傾けている。

いつの間にかさやとタカちゃんの姿がフロアから消えている。
どうやらタカちゃんが帰ったようだ。

例の大画面は、南の島の映像から、イタリア「セリエA」開幕戦の中継に変わっていた。

インテルがリードしているようだ。

相変わらず梅崎と静は、大画面を見ていないようだ。
ゆっくりと、音もなく一人の時間が流れしていく。
しばらくして、さやがテーブルにやってきた。

「こんばんは。今日は呼んでくれてありがとう。」「
さやがちょっと憂鬱そうな笑顔で梅崎の向かい側に腰を下ろした。
「いえいえ、いらっしゃい。こんなテーブルで申し訳ないけど、ゆ
っくりしていいってよ。」

梅崎が精一杯の笑顔で答える。

梅崎はよくお店の女の子のような気の使い方をする。
この言葉を聞いて、さやは照れたように笑っている。

静はいつものようにやはり完璧な微笑を、梅崎にもせずに見せ
ている。

「さやちゃん。何飲む？」

梅崎が尋ねた。

やはり梅崎がホスト役を引き受けているようだ。

静は仕事中だということを忘れたように、梅崎に寄りかかり、や
はり完璧な微笑を口元に浮かべている。

さやの表情は少し明るくなつた。

「今日はお酒の気分じゃないので、ミネ（お水）でいいわ。すみません。」

梅崎は新しいミネラルウォーターをボーグに頼み、さやのレディースグラスに注いだ。

やはり、ここでも梅崎がホスト役を続いている。

静は早く本題を切り出せとばかりに、梅崎を見つめ、梅崎のわき腹をつついている。

「さやちゃん、さつきタ力ちゃんに何かを押し付けていたようだけど、もしかしてあれは噂の指輪？」

梅崎が頭を搔きながら聞いた。

いつの間にか梅崎はソファーに腰掛けなおし、テーブルの上に身を乗り出している。

隣で静が同じようなカツンでやはりテーブルの上に身を乗り出している。

「その話、知っているんですか？」

梅崎と静は一瞬見つめあい、さやに向かつて二人同時にうなづいた。

「給料二か月分の指輪だとか・・・。」

静が興味を隠せないように聞いた。

目をキラキラと輝かせていた。

静はいつの間にかグラスを重ねていたようだ。

静の頬が上気している。

「ちょっとそれはオーバーですよ。実際はもっと安いです。」

さやは苦笑しながら、きれいな顔の前で大きく手を振った。

「なんで、そんなエンゲージリングを受け取ったの？」

静はハテナがいっぱい、好奇心がいっぱいだ。

好奇心に目を輝かせている静もとても魅力的だ。

「一ヶ月半くらい前、同伴した時に私が指輪を眺めていたのがことの始まりだったんです。そうしたらタ力ちゃんがボーナス出たから

買つてあげるつて言つんです。ちょっと高いから、貰つちやつたら重いかなとも思つたんだけど、その指輪、前からかわいいなと思って、けつこう欲しくて自分で買おうか悩んでたんですよ。でもそのときはそれで終わつたんです。

さやはそのきれいに澄んだ瞳で田の前にいる一人を交互に見た。

「うんうん、それから。」

静が相槌を打つ。

静の瞳もキラキラと輝いているがやつぱり澄んでる。

「それから何日かして、タカちゃんが指輪を買ってお店に持つてきました。サイズはこの前私が試しにめめていたのを横で聞いていたらしくて、サイズもぴつたり。」

さやは苦笑している。

「もう買つてきちゃつたし、欲しかつた指輪だつたし、私も貰つとけばよいかなつて、つい貰つちやつたんです。」

今度は梅崎と静が苦笑する。

さやを見ると、さやも苦笑している。

「ずっと一緒にいようね、とか言つて渡されたんだけど、いつもタカちゃんはそんなことを言つから、あまり気にせず貰つちやいましだ。私、やっぱりちょっとトロいですよね。」

さやの口調はだんだん自嘲的になつてきた。

「トロいだなんて、北島さんのときはうまくかわしたじやない。みんな、さやちゃんは鋭いつて言つてたわよ。」

「実はあの時、本当はすごく行きたかったんです。でも、どうしても大学のゼミの関係で行けなくて。だから北島さんの気持ちに気づいてかわしたわけじやないんです。」

さやの答えに三人は笑つた。

とてもホンワカした笑いだった。

さやが先を続ける。

「しばらくして、タカちゃんが来たときに気がついたんです。私が貰つたのと同じ指輪をタカちゃんがしている。それも左手の薬指。

ペアリングだつたのつて？ そうしたら、タカちゃんが、私の親に挨拶行くとか、タカちゃんの親に会つてほしいとか、結納がどうのとか・・・。私、パニクリました。何、何のこと？ つて。」

さやはここまで一気に話すと、ミネラルウォーターを口にし、喉を潤した。

梅崎と静。今度は笑わずに、一人目を合わせた。
なんといつ、タカちゃんの暴走、爆走、妄想族。

恋は眞田。

十月になった。

さやは九月いっぱいでお店を辞めた。
留学のめじがついたのだ。

一度、実家に帰り、準備をするらしい。

「今までいっぱいありがと。」

さやはそのきれいな瞳に涙をいっぱい浮かべて、ひそやかにお店を去つていった。

タカちゃんはといづ、きつぎりまでさやがお店を辞めることを知らず、あきらめ悪くお店に通つてきただが、さやが辞めると同時にその姿を見かけなくなつた。

タカちゃんの夢、さやは幻影おほねいと消えた。

そう、じじは「クラブ ファントム 幻影」。

すべてがまぼろしの出来事。

色と欲と見栄の世界。

「 もう、本当に秋だね。今日の空そらはまだ青く高く澄んでいた
わ。」

静がつぶやいた。

梅崎は足を放り投げたままのいつも姿勢で、ただ静の声を聞いた

ている。

「秋は恋の季節というナビ、恋つて良い」とばかりじゃないのね。
わやわやんとタカちゃんを見ていてそう思つたわ。私は冷静かしら。
・・。」

静は梅崎を見つめた。

視線が出会う。

梅崎の目に戸惑いの色が見えたが、一瞬で消えた。

「静は大丈夫だよ。しつかり季節の移ろいを感じている。静の心は
穏やかだよ。」

第一話につづく・・・予定

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0072f/>

「クラブ ファントム」

2010年10月26日05時13分発行